自閉症児における言語機能の獲得条件
―コンピュータ支援指導による等価関係の成立―

山本淳一、清水裕文
明星大学心理学研究室

【目的】広汎性発達障害児や精神遅滞児は、言語、認知、社会性、動機づけなどの広い範囲での障害があるため、言語指導を行う際、言語機能や、認知、動機づけなども含めてアプローチする必要がある。また、個別的な機能をターゲットにするだけでなく、それぞれがいかに子どもの全体的な行動系の中に統合されていくかを明確にしていく必要がある。それらをより効率的なかたちで行うための方法としてコンピュータ支援指導がある。本報告では、自閉症児、精神遅滞児にコンピュータによる言語・認知を統合化していく指導を通して、それらの変容課程に検討を加え、認知・言語の成立のメカニズムについてその可塑性という点からの系統的な分析方法を考察する。

【研究１】（ひらがなと漢字の書き分け）

(1)方法：２名の自閉症児に対して、まず漢字とひらがなで表記された 16 種類の文字を、漢字とひらがなに分類することで刺激クラスの形成を試みた。次に、「漢字」と記された見本刺激のもとで 1 種類の漢字（「絵」）を選択し、「ひらがな」と記された見本刺激のもとで１種類の平仮名（「え」）を選択する訓練を行った。その後、同じ見本刺激のもとで、他の 14 種類の文字が適切に選択できるか、その逆の関係が成立するかを評価した。最後に「～を漢字（平仮名）で書いて下さい」という指示のもとで、適切な文字を筆記できるかを評価した。

(2)結果：２名の参加児とも、漢字、ひらがなの表記体系を獲得し、それぞれの書き分けが可能になった。

【研究２】（「音声」-「単語」-「事象」の等価関係の統合化）

（１）方法：１名の自閉症児、１名の精神遅滞児に対して、音と絵と漢字の間の等価関係（equivalent　relation）が成立するための条件を検討した。訓練では、絵を見本刺激、漢字を比較刺激とした見本合わせを指導し、適切な比較刺激を選択したときには分化結果（differential　outcome）として見本刺激に対応した音声刺激を提示した。訓練後に、直接的な訓練がなされていない関係が成立するかどうかを評価した。

（２）結果：いくつかの訓練事例を重ねることにより、「音声」「絵」「漢字」の間に等価関係（「読解」「聴取」「聴理解」「呼称」「読字」）が成立した。

【全体的考察とまとめ】

言語の様々な働きを等価関係という点から分析し､その中のいくつかの関係を訓練し、それ以外の関係の成立を評価していくということが、自閉症児、精神遅滞児の言語の形成と統合化に有効であることが示された。